

ハックは夢をみたか？

Did Huck Dream?

江 頭 理 江

Rie EGASHIRA

国際共生教育講座

(平成29年10月2日受理)

1.

アメリカ大陸に初めて移り住んだ人々は、いつ、どこから、移ってきたのであろうか。彼らは、どういう人々であったのだろうか。この質問は、最近になってようやく答えやすくなってきた印象があるが、それはなぜなのか。最初に「アメリカへやってきた人々」という表現からわかるように、アメリカ大陸に、人は移り住んできたのである。もちろん「移民大国 アメリカ」というような常套句から、当然のこととして認識されがちであるが、猿谷要の次の解説が正確なところで、そのことを一般の人はしばしば忘れている。

この人たちは、おそらく紀元前 25000 年頃から 12000 年頃にかけて、何回にも分けてアジアから移住してきたと考えられている。(中略) 彼らは最初にアメリカへやってきたアジア系移民なのである。このことの持つ意味はかなり重要であると思う。(29)

最初にアメリカへやってきたアジア系住民である彼らのことを、American Indian と呼んできたが、現在では、先住の民であることの意味を重視して Native American と呼ぶことが多い。彼らこそが、アメリカのネイティブ（先住者）なのである。猿谷は、さらに興味深いエピソードを紹介している。それは、第二次大戦中の日系アメリカ人の強制収容所収容の作業を強いられた人々に、ネイティブ・アメリカンが多かったのは、一般のアメリカ人たちが、この両者の間に明らかな人種上の共通性を見たからであるというのである。(29) 収容作業のしやすさを重視して、厄介な仕事がネイティブ・アメリカンに任されたということなのであろう。日系アメリカ人とネイティブ・アメリカンとの間の人種的特徴の共通性について、確かに我々は容易に納得する。このような厄介ながらも大事な仕事を任されたネイティブ・アメリカンであるが、彼らの歴史は長い間一般のアメリカ白人の歴史からは距離を置かれたものとなっていた。彼らに関する研究は最近はかなり進んできたが、あえて看過されてきた部分があるのは、アメリカにその後移住してきた WASP にとって、ネイティブ・アメリカンの歴史を隠さざるを得ない事情があったからである。

文学の世界において、ネイティブ・アメリカンが登場するものは、たとえば、Charles Brockden Brown の *Edger Huntly* や James Fenimore Cooper の *The Last of the Mohicans* が挙げられよう。これらの作品においては、ゴシックロマンティック的視点からの自然の恐怖やネイティブ・アメリカン対ワスプの戦いが描かれつつも、人間の営為によって自然が壊されることへ警鐘を鳴らす、作家の視線が強く表れていることが特徴的である。神格化して描かれた自然の前に佇む人間の弱さは、ワスプがネイティブ・アメリカンを駆逐していく辛辣な行為が行われつつあったアメリカの現実を、覆い隠すものでもあった。1830 年のインディアン強制移住法や 1836 年のアラモの戦いは、アメリカ史に早くから既述されてきたネイティブ・アメリカンに対する悪行であったが、1826 年に出版された『モヒカン族の最後』には、自然を壊す人間の行為の悪辣さが象徴的に描かれているものの、ワスプがネイティブ・アメリカンを駆逐していった事実が語られることはほぼなかったのである。

アメリカの現実の状況をこのように振り返ったとき、1840年代以降の Manifest Destiny 「明白な天命」熱の高まりの中で、アメリカを見つめ続けた一人の作家を思い出さずにはいられない。Mark Twain は1835年に生まれ、1910年に亡くなった、19世紀アメリカの国民的作家である。彼の作品は、時には時間を行き来してまた場所も越えて、という壮大なものもあるが、中心となるのは、あくまでもアメリカ、彼が生まれ育ったミズーリ周辺を想起させる地域に軸足を置いた物語である。トウェインの生きたアメリカは、上で述べたような白人がネイティブ・アメリカンを駆逐していく様相、そして国内唯一の戦闘と言える南北戦争、機械文明への急速な転換や、都市化・大量化への変化を遂げた大変貌の時代であった。この変貌の時に生きたトウェインは、変動するアメリカの中で、物語を描き、時にアメリカを批判した。

本稿では、ネイティブ・アメリカンがワスプによって土地を奪われ、frontier（荒野）が失われる時代に生きたトウェインが、それらを背景として、どのように物語世界を構築したのかについて、アメリカの歴史的事象を踏まえ検証するものである。19世紀末のアメリカン・ドリームの衰退の中で、トウェインは何を見つけたのであろうか。

2.

1840年代の「明白な天命」熱の高まりは、アメリカにおいて、急速な社会変化を巻き起こした。白人が西へと移動し土地を取りこんでいく西漸運動は、神から与えられた天命として認められていることを掲げ、彼らは自らの行動を正当化しようとした。しかしながら、これは紀元前の時代にユーラシアから渡って来た最初の移民たちが文字通り長い時間をかけて開墾してきた土地を奪い取る行為に過ぎなかったのである。ネイティブ・アメリカンに対する理不尽な侵略が繰り返され、多くの人命が失われたことは明らかであるが、その事実が「明白な天命」のキャッチフレーズのもとに覆い隠されたことは、ワスプの行為の正当化に他ならない。野村達朗は、先住の人々を征服する行為を以下のように解説している。

西部の先住民は白人による西部の鉱業開発や農業開発に押されて後退を重ねた。彼らの生活の糧はバッファロー（野牛）であった。白人たちがバッファローの猟場を荒し、乱獲したために、バッファローの数はほとんど絶滅に近いまでに激減してしまった。連邦政府は、生活手段を奪われた先住民たちを保留地に囲い込んで管理する政策をとった。これに抵抗するものに対しては度重なる掃討戦が強行された。彼らは白人の圧倒的武力の前に敗北を重ねた。この掃討戦の中で「野蛮人」の典型、白人「文明」の対極にあるものとしての先住アメリカ人のイメージは固められた。（中略）

連邦政府は、1887年、ドーズ法によって先住民に対する政策を大きく転換させた。この政策の本質は先住民の「文明化」にあった。つまり、ここには土地所有と堅実な農耕定住生活に裏付けられた市民権という「アメリカ文明」の理念が示されていた。（115-16）

ネイティブ・アメリカンを、蛮人いわゆる savages の典型と見做したことは、あくまでも白人側の戦略であり、アメリカ社会の文明化を阻害する要因として彼らを位置づけることが目的であった。白人の西漸運動は、明白な天命によって正当化されるとともに、アメリカ文明の高度化を阻害する要因を排除することとしても認められたのである。ヨーロッパからの移民に対して、アメリカン・ドリームの実現、つまりネイティブ・アメリカン所有の土地を取りあげることが、農耕定住生活の定着の上に成り立つアメリカ文明の促進として、さらに正当化された。

この時代にあって、トウェインは、作品世界の中の重要な場面にネイティブ・アメリカンを書きこんでいる。1884年にイギリスで出版、1885年にアメリカで出版された *Adventures of Huckleberry Finn* は時代と場所が作者によってわざわざ設定されている。

Adventure of Huckleberry Finn

(*Tom Sawyer's Comrade*)

Scene: The Mississippi Valley

Time: Forty to Fifty Years Ago

読者がまず目にする本のタイトルページに、このような形で、場所と時代の設定を説明する必要がトウェ

インにはあった。この物語は *The Adventures of Tom Sawyer* を書き上げたトウェインが、1875 年 7 月 5 日に W.D.Howelles に宛てた手紙の中で、すでに構想が出来ていたことを書き送ったことが良く知られている。

I have finished the story [*Tom Sawyer*] & didn't take the chap beyond boyhood. I believe it would be fatal to do it in any shape but autobiographically – like *Gil Blas*. I perhaps made a mistake in not writing it in the first person. If I went on, now, & took him into manhood, he would just be like all the one-horse men in literature & the reader would conceive a hearty contempt for him. It is *not* a boy's book, at all. It will only be read by adults. It is only written for adults.

.....

By & by I shall take a boy of twelve & run him on through life (in the first person) but not Tom Sawyer – he would not be a good character for it. (*Authoritative Text* 299)

この中でトウェインは、少年キャラクターを描き続けて、彼が大人になった後までを描き続ける必要性を語っている。そのためにトムは適任ではなく、それにふさわしいのは、『トム・ソーヤー』の中で親たちが決して見本としない浮浪児のハックであった。しかも 3 人称ではなく 1 人称で語るキャラクターを、トウェインはすでに 1875 年の段階で考えていたわけである。その後執筆には時間がかかって、実際には約 10 年後に『ハックルベリー・フィン』を出版した。そしてその物語は、時間が約 40 ～ 50 年も巻き戻されている。これをどのように考えるべきであろうか。

当時は、ネブラスカ、カンザス、ユタ、ニューメキシコのインディアンテリトリーや、自由州、奴隷保有州というような括りで地域区分がされていたようである。(物語世界とも呼応させるため、ネイティブ・アメリカンではなくインディアンを使うこととする。) トウェインが生まれ育ったミズーリ州は、南部の中でも北に位置し、彼の家にも奴隷がいたが、奴隷たちの待遇はいわゆる深南部と比べると穏やかなものであった。奴隷制度の悲惨さは子どものトウェインにはあまり感じられなかったようで、彼は奴隷制度のどこが悪いのかわからなかったというようなコメントも残している。トウェインは子ども時代を過ごした後のトムを書くことが想像できなかったため、子どものハックを書くことで、自らの子ども時代に近いところへと、明確に時間を巻き戻した。1880 年代の実際のトウェインは、東海岸の Connecticut 州 Hartford に立派な屋敷を建てていたが、彼はもっとも思い出深いミシシッピ河岸、そして 1840 年頃へと時間を戻していたわけである。トウェインがこの本を執筆していたのは 1875 年から 80 年代初めであり、奴隷制度については、1865 年に奴隷解放宣言が出され、公には制度は解消されていた。1880 年代を生きていたトウェインは、アメリカ史において重要な年代の一つである、1890 年のフロンティアの消滅を間近に見据えた時にあって、あえて自分が描く物語世界を、奴隷保有時代、さらに具体的に言えば、ネブラスカやカンザス等のインディアン居留地を近くにひかえる 1840 年代頃のミシシッピ河岸のミズーリに設定したのである。この物語の冒頭は、非常に印象的である。

You don't know about me, without you have read a book by the name of "The Adventures of Tom Sawyer." but that ain't no matter. That book was made by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly. There was things which he stretched, but mainly he told the truth. That is nothing. I never seen anybody but lied, one time or another, without it was aunt Polly, or the widow, or maybe Mary, Aunt Polly – Tom's aunt Polly, she is – and Mary, and the widow Douglas, is all told about in that book – which is mostly a true book; with some stretchers, as I said before.

Now the way that the book winds up, is this: Tom and me found the money that the robbers hid in the cave, and it made us rich. We got six thousand dollars apiece – all gold. (13)

ハックは、一人称で“you”に呼びかけ、次のようなことを語っている。「前の本(『トム・ソーヤー』)はミスター・マーク・トウェインによって書かれており、だいたい真実が語られているが、彼(トウェイン)がわざと広げて語ったところもある。それでもだいたい真実であると言っておこう。うそをつかない人をおれは見たことはないから。」「ハックルベリー・フィン」における語りの人称の問題については、拙論(「姿を変える子どもたち」)に譲るが、改めて今ここで一つ確認する。

冒頭の“you”は果たして誰なのか。通常、この「あんたたち」は物語の読者と解釈されるであろうか。ハックは、物語の登場人物であるとともに、読者と作者トウェインを繋ぐ役割としても存在していると読めよう。ここでは『トム・ソーヤー』のプロットを、その作中人物でもあったハックが、解説する形を取っている。トムとハックが泥棒の隠した金を見つけて大金持ちになったことは、重要な物語中の出来事であった。浮浪児のハックが、6000ドルもの大金を手に入れて金持ちになっているというのである。このようなことが実際のアメリカでも起きていたのであろうか。

上に述べたように、当時のアメリカには、ネブラスカ、カンザス、ユタ、ニューメキシコ等のインディアンテリトリーと奴隷州、そして自由州が存在した。1845年に提唱された「明白な天命」熱は、白人たちの西漸運動を加速させ、もちろん彼らの目的は、誰の物でもない土地を我が物とするためであったが、「誰の物でもない」土地は、実際はインディアンのもので、それもすでに場所が限られ縮小しつつあったため、土地を手に入れる可能性は減りつつあった。が、アメリカ史において、西漸運動をさらに加速させた出来事が起こった。猿谷によれば次のようになる。「カリフォルニアの金鉱発見は48年のことで、49年から50年にかけて、東部から人びとが熱狂的に集まった。そのフィーバーぶりは、一時、法も秩序も及ばない世界を作り出した。」(90)

その歴史的事実を踏まえ、再度物語に立ち返る。『トム・ソーヤー』の最後、トムとハックが6000ドルもの大金を手に入れている。「その内容はだいたい本当のことで、あんたたちは『トム・ソーヤー』を読んだことがなければおれのことを知らないだろう」とハックは言うが、『トム・ソーヤー』は売れ行きが良かった本であったから、大金持ちの2人を知っている読者は実際は多かったことであろう。しかもここで泥棒と書かれている人物は、実はインジャン・ジョーのことを指し、彼がインディアンと白人の「混血」の男であることは周知の事柄であった。このように考えると、実はハックにまつわる物語は、たとえば次のような解釈は可能であろうか。『ハックルベリー・フィン』の冒頭部分においては、1840年代の「明白な天命」熱に乗った者たちが、インディアン（実際は白人との混血であるが）から大金をせしめて成功した物語が象徴的に描かれているのであると。「アメリカン・ドリーム」を実現した者たちの成功物語が、『トム・ソーヤー』で描かれるハックとトムの様相であると言えようか。

『ハックルベリー・フィン』冒頭部分の続きの個所においては、次のような記述が出てくる。“The widow Douglas, she took me for her son, and allowed she would civilize me;” (13) ここでcivilizeであろう単語をcivilizeと変えて綴らせているのである。文脈から見ると「しつける」という意味であろうが、『ハックルベリー・フィン』が「アメリカン・ドリーム」を実現したキャラクターによって語られているという仮説を取れば、civilizeの意味を文明との関わりの中で解釈することも必要であろう。野村が解説しているように、ネイティブ・アメリカンが白人文明の対極にあり、「野蛮」な象徴と見做される時、civilizeは単に「しつける」という意味を超えて、文明化との関わりの中で再度考える必要がある。トウェインが、cではなくsを使ってcivilizeと綴ったことは意図的な変更である。前の物語『トム・ソーヤー』からの「アメリカン・ドリーム」物語を提示されている「あんたたち」である我々読者は、トウェインのこの変更の意図をどのように受け取るべきであろうか。次章では、「アメリカン・ドリーム」物語と解釈できる『トム・ソーヤー』の中で、インジャンがどのように描かれているのか、トムとハックが泥棒インジャンからどのように金を横取りしたのかを見ることとする。

3.

『トム・ソーヤー』第7章最後において、Becky Thatcherに失恋したトムは、学校を後にしてCardiff Hillへ向かい、さらにそこを超えて、森へと入って行った。この物語においては、トムは悩みを抱えたとき、カーディフの丘へ思いをはせることで心を和らげる個所が出てくるのだが、この時のトムは、その丘をも越えて森へと入っていった。彼は死ぬことで悩みから解放されるかもしれない思いを巡らす訳だが、トムというキャラクターは一つの所で思考を留まらせておくことはできないようで、現実から逃避して想像の世界へと入っていくことは度々あった。

自らの想像の中で、彼はピエロになること、軍人になることを想像し、「軍人になって、何年もたったあと戦いに疲れ、功績をあげたのちに帰ってくること」(57)と思う訳であるが、その考えはすぐに捨てて、次のように考える。

No—better still, he would join the Indians, and hunt buffaloes and go on the warpath in the mountain ranges and the trackless great plains of the Far West, and away in the future come back a great chief, bristling with feathers, hideous with paint, and prance into Sunday school, some drowsy summer morning, with a blood-curdling war whoop, and sear the eyeballs of all his companions with unappeasable envy. (57)

ここでトムは、「インディアン仲間に入り、一緒にバッファローを狩り、道なき道をはるか西部まで進み、将来は偉大なインディアン部族の酋長になったのち、羽を塗りたくって日曜学校に侵入し、仲間からの抑えがたいほどの嫉妬の眼の玉を焼き焦がす」ことを夢見ている。子どもがインディアンに憧れ、その仲間入りを願う姿は、実際に起きていたインディアンに対する虐殺や土地の剥奪の現実とはかけ離れたものとなっている。インディアンは「荒野」を生きるヒーローとして、ある種の憧れの存在として、ここでは描かれているわけである。また、トムやハックが友達とともに、家を飛び出して野宿生活をおくる時、ホームシックを忘れるための遊びの中心になるのは、インディアンごっこ、海賊ごっこであった。トムのみならず、3人全員がインディアン部族の酋長となる場面も描かれる。

This was to knock off being pirates, for a while, and be Indians for a change. They were attracted by this idea; so it was not long before they were stripped, and striped from head to heel with black mud, like so many zebras—all of them chiefs, of course—and they went tearing through the woods to attack an English settlement. (110-11)

3人全員がインディアンの部族長になることを夢見て、イギリスの入植者を襲撃するというのである。インディアンであるならば、イギリス人を襲撃することも当然想定されるという訳である。

『トム・ソーヤー』の冒頭においても、実はトウェイン自身は“The Author”として顔を出している。登場の仕方は、『ハuckleberry・フィン』において、物語の中でハック自身が“Mr. Mark Twain”と一人称で呼び掛ける形とは異なっている。物語の始まる前、“Preface”「序文」に作者として現れ、読者に解説をしているのである。ここでトウェインは「この本の中で起こったことはほとんど実際に起こったことである」と言う。

Most of the adventures recorded in this book really occurred; one or two were experiences of my own, the rest those of boys who were schoolmates of mine. Huck Finn is drawn from life; Tom Sawyer also, but not from an individual—he is a combination of the characteristics of three boys whom I knew, and therefore belongs to the composite order of architecture. (2)

トウェインが少年時代に見聞きしたことは、ネブラスカ、カンザス等のインディアンテリトリーが存在していた1840～50年頃のことであろう。トムとハックがインディアン部族の酋長になり、イギリスからの入植者を攻撃することを想像することを述べたが、インディアンは当時の子どもにとって、荒野を勇敢に駆け回るヒーローであったのだろう。

物語の中では、実際のキャラクターとして、インディアンと白人の混血であるインジャン・ジョーが登場し、トムとハックは、ジョーの残虐な行為を思いもかけず目撃することとなる。インジャン・ジョーというキャラクターは町のコミュニティに属する事ができず、人々から恐ろしがられて生きてきた人物であり、実際の様子以上に子どもたちにとっては恐怖の対象であったようだ。死体発掘を依頼されたジョーを墓場で目撃したトムとハックは、この時思わず次のように叫ぶ。“That’s so—that murderin’ half-breed! I’d druther they was devils a dern sight. What kin they be up to?”(64)「混血のインディアンよりも、悪魔を目撃するほうがまだよかった。」

トムとハックにとって、目の当たりにするインディアンの姿は恐怖であり、それを裏付けるかのごとく、彼の悪行は殺人を犯す形で読者にも示される。一方、トムとハックが「ごっこ遊び」の中で扮装するインディアンは、野蛮さはあるものの、荒野を駆け巡る勇敢さを持った、子どもにとっての憧れのヒーローとして描かれている。しかもその憧れのインディアンの酋長は、羽を塗りたくった、いわゆるステレオタイプな

アメリカインディアンとして物語の中では描かれている。実在の恐ろしいインジャン・ジョーと、ヒーロー的インディアンの、二つのタイプのインディアンのイメージが存在しているわけである。この点について、大島由起子は次のように指摘する。「トウェインという作家は諸手を挙げて先住民羨望などしない。先住民表象については、生涯、揺れを伴いつつ、時に苛立ち、時に打算を重ねたと考えられる。」(75) インジャン・ジョーについては、洞窟の中で彼が亡くなっていたこと、そしてその埋葬のシーンも、印象的である。ジョーの葬儀に、浮かれたように町の大勢の者が押しかけたが、その理由は明確ではない。そして、さらに多くの人々が、ジョーの恩赦を願っていたこともわかる。少なくとも彼が村人5人を殺していたにもかかわらず。女性や子どもたちがインジャン・ジョーに関することに熱狂している様子は、以下のように加速度的に増していき、理屈や道理を超えた一つのムーブメントとなっていく。

Injun Joe was buried near the mouth of the cave; and people flocked there in boats and wagons from the towns and from all the farms and hamlets for seven miles around, they brought their children, and all sorts of provisions, and confessed that they had had almost as satisfactory a time at the funeral as they could have had at the hanging.

This funeral stopped the further growth of one thing—the petition to the governor for Injun Joe's pardon. The petition had been largely signed; (201)

トムとハックが、インディアンを恐怖の対象と見なすよりも、むしろ荒野を駆け巡るヒーローとして憧れていた様子と、共通する要素がここにある。もっとも、この熱狂する群衆の姿は、後述する『ハックルベリー・フィン』の中の Sherburn 大佐の家に押しかける群衆の様子とも共通する。しかもこの時の群衆の様子は、「まるでインディアンのように、ウォーウォー、ワアワアと叫ぶ」(161) と、インディアンになぞらえて語られているのである。

物語の結末では、トムとハックはインジャン・ジョーが洞窟に隠しておいた大金を手に入れ、思いもかけず大金持ちとなった。冒険の結果、幸運に大金を手に入れて大金持ちになったトムとハックの物語は、荒野を目指した者たちや金鉱を掘り当てることを夢見てカリフォルニアへ向かった者たちが、望み通りに土地や金を手に入れてアメリカン・ドリームを実現した、究極の成功物語と読み替えることも可能であろうか。

4.

『トム・ソーヤー』の中で、トムとハックが憧れを抱いたインディアンの実際の状況については、紀平栄作・亀井俊介は『アメリカ合衆国の膨張』の中で次のように解説する。

チェロキーはジョージア州北部にあった居住地を国家として組織することを目指し、合衆国憲法の三権分立制を採り入れた独自の憲法を制定するまでの、政治組織の形成を進めた。しかし、そこまで進もうとしたインディアン部族の動きは、白人が北アメリカ大陸に土地を持つことで「自由」となるという合衆国社会の論理と、明確に相入れなくなっていた。

(中略)

強制移住は抵抗にあったただちには進まなかった。とくにチェロキー族は、最後まで彼らの土地所有権を連邦最高裁の審議まで持ち込んで主張し、対抗した。だが結局彼らもまた強制的に移住させられていった。1838年12月から翌年にかけて、およそ18000人のチェロキー・インディアンがジョージア州からオクラホマへと移住させられた事件が「涙の道」と呼ばれた出来ごとであった。わずかな衣服と食糧しか支給されず、馬車も不十分なままに、冬の寒気の中で強行された移住のために、途中で4000人もの人々が死亡するという悲劇の旅であった。かくしてミシシッピ川までの北アメリカ大陸は、すべて白人の土地となっていったのである。(90-91)

チェロキー・インディアンが、先祖代々の土地を守るために、土地所有の問題を最高裁審議にまで持ち込んだということは、協力者の力も得たのであろうが、彼らが知的な人々であったことを意味する。しかしながらそのように抵抗を続けても、彼らの土地は結局取り上げられた。インディアンの土地を取り上げることに、白人たちは熱狂していたのである。それこそが貧乏白人が「土地を手に入れる」という夢を実現する唯

一の方法であるからこそ、彼らはそのようにするしかなかったこともまた意味している。

『ハックルベリー・フィン』の設定年代が1840年代あたりに置かれたことは、この状況と関係がある。1835年生まれのトウェインは、このあたりの出来ごとを実際に体験したというよりも、見聞きしていたであろう。彼があえて物語の時間をそこへと戻した意味は大きい。当時のミシシッピ川以西の土地にはインディアンが居住していたのであるから、ハックとジムが河を下るプロットの中で、彼らは常にインディアンに遭遇する可能性を持っていた訳である。実際『ハックルベリー・フィン』の中でインディアンが描かれる。が、『トム・ソーヤー』におけるほどの頻度ではない。その中の一か所を挙げる。これは、飲んだくれのBoggsを射殺したシャーバン大佐を射殺しようと、群衆が彼の家に押しかけたときの群衆の様子を描いた部分に表れている。

They swarmed up the street, towards Sherburn's house, a-whooping and yelling and raging like Injuns, and everything had to clear the way or get run over and tromped to mush, and it was awful to see. (161)

群衆が雄叫びをあげる様子を、インディアンが叫び声を上げる様にステレオタイプにたとえた記述である。このような類のインディアンの描写は他にもあるが、その登場頻度は『トム・ソーヤー』と比べて格段に低い。ただし、『ハックルベリー・フィン』の中で、インジャンはやはり大きな意味を持つ。それは物語最後のChapter the Lastにおいて、ハックが語る決意のメッセージの中にある。

第31章において、Phelps農場に捉えられた奴隷のJimを救出するためにハックが“All right, then, I'll go to hell”(223)と決意したことは、この物語を少年の成長物語と捉えたとき、大きな意味を持つ。ハックの自己覚醒の一つのクライマックスであり、その後のジム救出物語があまりのドタバタ劇になっているという批判があればこそ、その直前のこの決意の意味は改めてクローズアップされる。これは果たしてハックに関わるinitiation storyの到達点なのであるか。32章以降の部分において、トムが前面に出てきて、既に奴隷の身分から開放されていたジムのための救出劇を繰り広げたところにおいては、ハックの更なる自己覚醒を見ることはできない。32章から最終章において、ハックが更なるイニシエーションを体験する場面は、物語の結末部分に表れる。トムはジム救出騒動でけがをしたが、回復したのちに、ハックを冒険に誘い出そうとする。“le's all three slide out of here, one of these nights, and get an outfit, and go for howling adventures amongst the Injuns, over in the Territory, for a couple of weeks or two;”(295)「3人でここから抜け出し、インディアンテリトリーの中で少しばかりわくわくする冒険をしよう」というのである。この誘いを、ハックはお金がないことを理由に断わる。しかし、ハック自身は実はインディアンテリトリーに行くことを考えていたのである。物語の最後、彼はこの後やらなくてはならないことを、次のように読者に告げる。“But I reckon I got to light out for the Territory ahead of the rest, because aunt Sally she's going to adopt me and sivilize me and I can't stand it. I been there before”(296)。「おれはだれよりも先にインディアンテリトリーを目指さなきゃならない。だって、サリーおばさんがおれを養子にしてしつけようとしているけど、おれはがまんできない。前に体験したことがあるからね」とハックが言うのである。物語の冒頭部分、ダグラス未亡人に引き取られているハックは、そこでsivilizeされる生活に辟易としていた。その後、飲んだくれの父親に監禁され暴力を振るわれ、ミシシッピ河に逃げた彼は、Jackson島で逃亡奴隷のジムと出会い、筏で河を下ることとなった。途中、ハックはジムが逃亡奴隷であることを人に伝えるべきか否かを悩み、良心の葛藤を体験し、31章ではジムのために「よし、地獄に行こう」と決意した。それ以降は突然トムが現れて、ハックは本来はやらなくてもよかったジム救出劇に巻き込まれた訳だが、物語の最後、彼は自らの意思で「テリトリーに行こう」と決意する。これをハックに関わる成長物語の到達点と見ることもできる。そのように考えるならば、ハックは、良心の葛藤を体験し、ジムを含め大人からいろいろと学び、ある種のsivilizeがなされてきたわけであるから、物語の最初とまったく同じようにsivilizeされるのはいやだと主張する必要もないのである。さらに言えば、civilizeされてきたであろうハックの状況を、civilizeではなく敢えてsivilizeと書き続けることも違和感がある。

語り手ハックが物語の最初にsivilizeと語るとは、学校に行かないハックだからこそその綴りの間違いだと捉えることも可能であろう。しかし、そう考えるならば、その後学校にも行って、自己覚醒も体験したハックが、物語の最後においてもsivilizeと綴りを間違えるはずはないのである。拙論で述べたことである

が、この物語は一人称のハックが語りつつも、しばしば作者のトウェインが顔を出す物語である。ハックに最後まで *sivilize* と綴らせることに、トウェインの強い主張がある。

1840～50年頃のアメリカ白人が「明白な天命」熱と金鉱発見熱に背中を押されて、西へ西へと、インディアン土地を取り上げることに熱狂したその一方で、非文明の象徴と見られたインディアンの中で例えばチェロキー族は、自分たちの土地を守るため最高裁への審議要求を行うという、文明的な行為を行っていた。インディアンは単なる野蛮人ではなかった。インディアンが居住した地域を、荒野といい、非文明の象徴と見なそうとした白人たちの狙いは、実は農耕定住生活の上に成り立つアメリカの更なる発展を狙ったに過ぎなかった。『トム・ソーヤー』の中で、トムとハックの大金の獲得を、アメリカン・ドリーム物語としてのプロットと読むこともできるが、『ハックルベリー・フィン』の冒頭がそのアメリカン・ドリーム物語から始まったにも関わらず、最後までハックに *sivilize* と綴らせたことは、自然や荒野への憧れもまた文明化の旗印のもとに消し去られつつあった現実のアメリカに、トウェインが警鐘を鳴らしたかったことを表すのではないか。白人のもたらした文明に脅かされ、自然は大いに傷つけられつつあったが、実は野蛮と文明との境界は曖昧であったのだ。トウェインが『ハックルベリー・フィン』のタイトルページに敢えて、「40, 50年前」と載せたのは、読者に必ずその時代のことを思い出させる意図があったのではないか。トウェインは、1840年頃のアメリカにおける「明白な天命」「西漸運動」「チェロキー涙の道」を読者に想起させ、フロンティアを一方的に駆逐してまで未来の夢を作り続けようとした結果の実際のアメリカが、フロンティアの消滅を間近にした白人の夢の喪失危機に陥っていることもまた、読者に想起させようとしたのではないか。トウェインは、野蛮と文明の境界を無理やり引いてまでも、白人があこがれ続けた土地を手に入れるアメリカン・ドリームの消失危機に、読者の目を向けようとしたのである。ハックが語る物語でハックが読者に見せてきたものは、あくまで過去から見た「夢」の物語であり、現実のアメリカは、経済発展の鈍化と世紀末を間近に控え、夢の喪失に陥った厳しい状況であった。インディアン土地を無情に取り上げた白人は、農耕定住を基本とする自由な世界を目指してきたが、一方では機械文明の急速な流入により、アメリカ人が憧れた自然は失われ、憧れの荒野もほぼ消滅していた。それを批判的に見るトウェインの思いは、ハックをして *sivilize* と綴らせ続けたのである。

『ハックルベリー・フィン』には続編の物語があるが、未完のまま終わっている。「誰よりも先にテリトリーに行こう」と決意したハックであったが、続編“Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians”においては、トム、ジムとともに3人で冒険に出かけることとなる。続編の冒頭部分から『ハックルベリー・フィン』とほぼ同様の口調でハックが語り始める。ポリーおばさんが、ミズーリ州を横切った西部との境界あたりの麻農場の親戚のところに行くことになり、そこへトムたちを連れていく、という内容である。『ハックルベリー・フィン』の最後の部分で、ハックはトムの誘いを断って、誰よりも先にインディアンテリトリーに行くことを語ったわけだが、この物語においては、そのような雰囲気はない。麻農場での生活はハックとジムにとっては実に快適そのものであったのだ。一方トムは前の物語と同じように、そこでの退屈さに耐えがなくなり、2人を何とかインディアンテリトリーへの旅に駆り出そうとする。

there's liver places than a hemp farm, there ain't no use to deny it, ...Tom Sawyer couldn't ever stand much lazying around;...

But me and Jim kind of hung fire. Plenty to eat and nothing to do. We was very well satisfied.
(34)

ハックとジムをテリトリーへと誘うトムのことは、『トム・ソーヤー』での憧れのインディアン部族の酋長のことを語った時と同じ論調である。

They're awful strong, and fiery, and eloquent, and wear beautiful blankets, and war paint, and moccasins, and buckskin clothes, all over heads, and go fighting and scaling everyday in the year but Sundays, and have a noble good time, ...Amongst the Injuns, life is just simply a circus, that's what it is. ...

Jim's eyes was shining, and so was mine, I reckon, and he was excited, and it was the same with both of us, ...

Course I warn't going to stay behind if they went, so I said I was. (36-37)

トムに説得され続けた結果、ジムがまずその誘いのことばに目を輝かせることとなり、次にハックも、「彼らが行くなら、おれもここにずっといないよ。だからおれはいくと言ったんだ。」という納得の仕方、インディアンテリトリーに向かうこととなる。「誰よりも先に一人でテリトリーに行く」と言っていたハックとは大違いの様子である。準備を重ねてテリトリーを目指して、農場を抜け出した彼らは、当初の願い通りインディアンのキャンプでインディアンたちに出会うことになる。インディアンの様子は以下のようなもので、ステレオタイプなインディアンのイメージもあるが、彼らはまた英語も少し話すのである。

They was big, strong, grand looking fellows, and had on buckskin leggings and moccasins, and red feathers in their hair, and knives and tomahawks, and bows and arrows, and one of them had an old gun and could talk a little English, (43)

物語では、その後のインディアンとの交流も友好的に描かれ、この先もインディアンとの融和の物語が描かれるのかと思われたその矢先、物語に突然変化が起こる。旅の途中で出会った、西部へ移住中の Mills 一家とも、共に仲良く過ごしていたトムとハックは、ある日インディアンたちの変化から何かが起こることを感じる。彼らは難を逃れるが、ミルズの父親、母親、3人の息子は殺され、娘たちとジムは連れ去られる。父親と母親の殺され方はシンプルで実に残虐である。

the Injun that had a gun, the one that Peggy fixed, shot her father through the head with it and scalped him, another one tomahawked her mother and scalped her, and then these two grabbed Jim and tied his hands together, and the other two grabbed Peggy, (47)

アメリカインディアンは、勝利の記念として敵の頭から頭皮をはぎ取ったというが、まさにその通りの行為を、トウエインはインディアンたちに行わせている。彼らが殺された理由は、実は明確ではない。このあと物語は、娘の婚約者がやってきて、娘の奪還をトムやハックたちと企てるプロットへと移っていくが、結局のところ物語は9章の中ほどで終わっている。これ以上、トウエインは書き進めなくなったという訳である。

この物語は、1884年、“written as a sequel to *Huckleberry Finn* when its author was at the height of his creative powers” (*among Indians* xiv) という具合に、トウエインの創作意欲が高かった時期に書かれたわけだが、それでも彼は途中で行き詰まり、物語が完結することはなかった。

sivilize にこだわり続けたトウエインは、『ハックルベリー・フィン』を書き上げたのち、その続編において、ステレオタイプで、しかも知的なイメージも兼ね備えたインディアンの様子を描いたが、突然彼らの様子を変貌させ、インディアンの典型的な虐殺方法を描いて、白人の西部開拓者を惨殺させる場面を書いた。そして、トウエインはこの物語を書き続けることができなくなったのである。

5.

ハックが sivilize されることを嫌悪する様子が、『ハックルベリー・フィン』の最初と最後で変化がないことを述べた。そこから、トウエイン自身が、インディアンを駆逐し、土地に夢をかけ続ける「明白な天命」政策批判を行っていると思える。そのように解釈すれば、トウエインのハックに変化はない。しかしトウエイン自身が置かれていた実際の状況を振り返ると sivilize を嫌悪するハックの姿に一見変化がなくても、トウエインには変化があり、アメリカにも変化があったことがわかる。トウエインは義理の甥の Webster に任せていた出版社経営がうまくいかず、また多額の資金を投入していた新型のタイプライター開発も頓挫して、1893年に自己破産せざるを得なかった。一方、『ハックルベリー・フィン』が出版された1885年頃のアメリカにおいて、白人を取り巻く社会状況も厳しくなった。1890年に行われた国政調査によって、フロンティアの消滅が確認され、インディアンから奪い続けた「誰のものでもない」と見做した土地が無くなったことが明らかになったわけだが、『ハックルベリー・フィン』が発売された1885年には、すでにフロンティア消滅の兆候は明らかになっていたであろう。アメリカ白人の夢の喪失は、トウエイン自身の夢の喪

失とまさに重なったのである。自己破産したトウェインは、多額の負債を返済するため、その後国外で講演活動を行い、約10年間アメリカを離れる。途中、アメリカの外から国を見た彼は、国内の土地に発展の夢を見てきたアメリカが、世界の秩序を整える建前のもと、「明白な天命」をなぞらえるかの如く、実際は帝国主義政策を採って、海外侵略を行ったことを公然と批判した。

ハックがcivilizeと綴り続けるのは、1840年頃のハックにとっては将来の、1880年頃の実際の時間を生きるトウェインにとっては現実の、いわゆる夢の喪失の危機を批判的に表しているのである。『ハックルベリー・フィン』が出た1880年頃にはすでに実際のアメリカは変化して、アメリカ白人が持ち込んだ「文明」により、社会はcivilizeされていたはずである。荒野の駆逐に警鐘を鳴らしてきたトウェインは、アメリカ社会の実際の時間の中で、civilizeがcivilizedされた結果のアメリカが、つまりはインディアンを駆逐してまで目指し続けた未来が、実際は夢の喪失感により危機的状況に陥っていたことを、皮肉に見つめたのである。Henry Seidel Canbyはトウェインの姿を次のように述べる。

He had undoubtedly shifted with his times from the extravagant optimism of Walt Whitman and his own Colonel Sellers and Manifest Destiny to the social criticism of the eighties and nineties and the Henry and Brooks Adamses who, like Henry James, believed that America, having overrun a continent, and failed to make a civilization. (265)

civilizeがcivilizedされた社会は、アメリカ白人にとっては期待すべき未来であったはずが、civilizedされた社会が実はアメリカン・ドリーム of 将来の姿ではなかったことを、トウェインは表している。いやむしろcivilizeと綴り続けることは、トウェイン自身の過去への憧れ、ヒーロー的なインディアンに象徴されるフロンティア世界への強い憧れでもあったのではなかろうか。

ハックは夢を見たのか？トウェインは、1840年頃のアメリカの過去の時間に戻って、ハック自身の口調でアメリカが辿ってきた道筋をもう一度語らせ、白人の残虐さとインディアンの友好的な姿を語らせ、19世紀後半のアメリカに対して警鐘を鳴らそうとしたのである。ハックの物語がその続編も含めて、ハック自身が語る1人称の物語である必然は、「明白な天命」のアメリカを知っていたトウェインが、1880年以降の現実のアメリカへと疑問を投げかけることから生じる。しかしこの頃のトウェインは実に迷っていた。「明白な天命」に象徴される二面性を持つアメリカの中で育ったトウェインは、ステレオタイプな憧れのインディアンヒーローを描きつつも、一方で野蛮なイメージで敵の頭の皮をはぐ残虐なインディアンを描いた。ハックは、誰よりも先にインディアンテリトリーに行くと言ったものの、結局、続編においては、トムからインディアンテリトリーに行くことを勧誘され、先に冒険を了承したジムに同調する形で、テリトリーへと出かける。このような消極的ハックが、トウェインの迷いを裏付ける。

civilizedされたはずのハックがcivilizeと一貫して綴ることについて、読者は疑問を持つ。多くの知的インディアンが命を落とし、移住希望の白人に土地を奪われていく様子、貧乏白人にとっては、土地獲得の夢をそのような流れでしか実現できないアメリカン・ドリーム。物語の中には実はもう一度過去に戻って、そこから将来の夢を見たかったハックがいる。しかし、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889)の中で、ヤンキーの男が6世紀のイギリスと19世紀を行き来しつつも、それが最後には眠りの中の夢であったに違いないと彼が思うのと同じように、ハックが将来に見た夢をもまた、眠りの中の夢にしか過ぎないと、1880年代の時間を生きていたトウェインは読者に語っているのではあるまいか。トウェイン自身の、自己破産や家族の死という厳しい現実も、彼は眠りの中で忘れたかったのではあるまいか。しかしながら、夢から覚めることが必然であるからこそ、トウェインは、アメリカの将来と自らの先々の姿を、容易に思い描くことができなくなった。「インディアンの中のハックとトム」の中で、白人を虐殺し彼らの頭の皮を剥ぐ残虐なインディアンを描いたのは、彼の迷いそのものを表している。夢の過去から現実を辿っても、それがアメリカの未来へ繋がるが見えなくなったトウェインは、そこでは物語を書き進めることができなくなった。現実を見続けようとしてきた作家は、北部のヤンキー男が、6世紀のイギリスにタイムトリップし、そこで機械文明国を創出するものの、最後は自らの手でその文明を破壊するというような、時間と場所を超えて行きつ戻りつする類の物語を書くようになった。トウェインは夢を見てきたのか。内在する思いが複雑に交錯する作家であるからこそ、イエスともノーとも一方的に言い難く、年齢を重ねたのちの彼は更に一筋縄ではいかなかったのである。

参考引用文献

- Canby, Henry Seidel. "Decline and Fall: Mark Twain," from *Turn West*, pp. 239-57, *Mark Twain Selected Criticism*. Ed. Arthur L. Scott. Dallas: Southern Methodist Univ. Press, 1967.
- Clemens, Samuel Langhorne (Twain, Mark). *Adventures of Huckleberry Finn: An Authoritative Text Backgrounds and Sources Criticism*. Ed. Thomas Cooley. 3rd ed. New York: Norton, 1999.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer*. New York: Bantam, 1981.
- ―― *Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians and Other Unfinished Stories*, Berkeley: Univ. of California Press, 1997.
- 江頭 理江 「姿を変える子どもたち」『マーク・トウェイン 研究と批評』第12号 2013年
日本マーク・トウェイン協会編 pp.12-19
- 大島 由起子 「先住民を恐れ憎しんで―トウェインの Silent Colossal National Lie との付き合い方」
『マーク・トウェイン 研究と批評』第5号 2006年 日本マーク・トウェイン協会
編 pp.71-79
- 紀平 栄作・亀井 俊介 『世界の歴史 23 アメリカ合衆国の膨張』中央公論社 1998年
- 猿谷 要 『物語 アメリカの歴史－超大国の行方』中公新書 1991年
- 野村 達朗編著 『アメリカ合衆国の歴史』ミネルヴァ書房 1998年

